

# 東京バッハ合唱団「月報」

[ 第 500 号 ] 2004 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.500

February 2004

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 「マタイ受難曲」における、群の役割 アリアを中心に

大村 恵美子

バッハの「マタイ受難曲」が、合唱（混声と児童）重唱、独唱、楽器の全演奏者を 2 つの群（Chorus）に分けて、その交替によって、多層的な登場人物の心と性格を、全曲にわたり織り上げたことは、この音楽作品の大きな特徴となっている。

その際に、バッハはどのような意図と配慮をもって、それぞれの曲を 群と 群とに振り分けたのだろうか。これが、今回の私の問題提起の源泉である。網の目のように精緻なバッハの音楽構造に迫るため、とりあえず、第 1 部に 6 曲、第 2 部に 9 曲あるアリアにのみ対象を絞って、追うことから始めてみたいと思う。

全 15 曲のアリアを表にすると、次の通りである（次頁・表1）。

### アリアの中の挿入合唱

これらのうち、群に属するものは 10 曲（S : 2 曲, S / A : 1 曲, A : 4 曲, T : 1 曲, B : 2 曲） 群に属するものが 5 曲（S : 1 曲, A : 1 曲, T : 1 曲, B : 2 曲）であり、さらに 群のうちの 4 曲には合唱 が挿入される（S / A : 1 曲, A : 2 曲, T : 1 曲）（次頁・表2）。

まずは、合唱が挿入される 4 曲を見てみよう。

Nr.20 テノール・アリア（T + 合唱）

アリア: Ich will bei meinem Jesu wachen <目覚めおらん イエスのもと>

+ 合唱: So schlafen unsre Sünden ein <われらが罪も眠り入らん>

他の 3 曲とちがって、この曲のみは比較的長い内容の合唱である。イエスの死の贖いを思い、目覚めていようと歌うテノールに対し、現実にはゲツセマネの園でイエスの苦悩をおいて眠り込んでしまった弟子たちであるが、それを反省した大局的な目で捉えなおして、自分たちの罪がイエスによって眠らされる、と受けとる。

Nr.27a ソプラノ/アルト二重唱（S, A + 合唱）

アリア: So ist mein Jesus nun gefangen <わがイエスは捕らわれる>

+ 合唱: Laßt ihn, haltet, bindet nicht! <待て 主を放せ! >

二重唱が、イエスが捕らわれ、引きゆかれることを歌うと、合唱は短く、鋭く 待て 主を放せ! と絶叫する。

Nr.30 アルト・アリア（A + 合唱）

アリア: Ach, nun ist mein Jesus hin <ああ 今や わがイエス去りぬ>

+ 合唱: Wo ist den Freund hingegangen <いずこに なが友は? >

イエス今いずこ、と探し求めるアルトに呼応して、合唱は一緒に主を尋ね求めようと、働きかける。

Nr.60 アルト・アリア（A + 合唱）

アリア: Sehst, Jesus hat die Hand <見よ イエス み手を差しのべたもう>

+ 合唱: Wohin? いずこ? >

十字架上のイエスが、その手を差しのべているというアルトに対し、合唱は短く 7 回 いずこ（ドイツ語原詞では Wohin? が 3 回、Wo? が 4 回）と、合いの手を入れるだけである。

すなわち、合唱 が挿入される 4 曲の 群アリアでは、合唱は 待て いずこ などの短い呼びかけで、現実的な緊迫感を引き起こし、強めている。

### 10 曲の 群アリア

さて、全 15 曲のうち 10 曲を占める 群アリアは、いずれも堂々として、内容も明確である。それぞれの曲を、短く特徴づけてみるならば;

ソプラノ・アリア（2 曲）

Nr.13 : Ich will dir mein Herz schenken <主に心ささぐ>

身も心もイエスに献げきる純真な魂。

Nr.49 : Aus Liebe will mein Heiland sterben <愛により わが主 死におもむく>

けがれなきイエスは、愛により死におもむく。この神秘にうたれて、真空のように時の止まる瞬間。

### 月報第 500 号 内容

・「マタイ受難曲」における、群の役割 大村恵美子...P.1

・私はアメリカのイラク侵略に なぜ反対し闘うか(最終回)

森井 眞...P.4

・寒風の 2003 年末に 喜びと希望の一日 大村恵美子...P.5

・お便り ゲーブハルト牧師、長谷川田鶴子様、布施靖子様...P.3

・2003 年度後援会会計報告...P.6

・別冊:「マタイ受難曲」の 5 つのアリアを追う 大村恵美子

表1 : 「マタイ受難曲」中のアリア全 15 曲

曲 Nr.	群	声部	曲名	(邦訳タイトルは大村恵美子訳)
第 1 部				
Nr.6		A	Buß und Reu	悔いは罪の心引き裂く
Nr.8		S	Blute nur	破れよ 心よ
Nr.13		S	Ich will dir mein Herz schenken	主に心ささぐ
Nr.20		T (合唱)	Ich will bei meinem Jesu wachen So schlafen unsre Sünden ein	目覚めおらん イエスのもと われらが罪も眠り入らん
Nr.23		B	Gerne will ich mich bequemen	いさみて 従いゆかん
Nr.27 a		S / A (合唱)	So ist mein Jesus nun gefangen Laßt ihn, haltet, bindet nicht!	わがイエスは捕らわる 待て 主を放せ!
第 2 部				
Nr.30		A (合唱)	Ach, nun ist mein Jesus hin Wo ist den Freund hingegangen	ああ 今や わがイエス去りぬ いづくに なが友は?
Nr.35		T	Geduld	耐えよ
Nr.39		A	Erbarme dich	憐れみを 主よ
Nr.42		B	Gebt mir meinen Jesum wieder	返せ再び わがイエスを
Nr.49		S	Aus Liebe will mein Heiland sterben	愛により わが主 死におもむく
Nr.52		A	Können Tränen meiner Wangen	わが涙 かいなく落つとも
Nr.57		B	Komm, süßes Kreuz	来たれ 甘き十字架よ
Nr.60		A (合唱)	Sehet, Jesus hat die Hand Wohin?	見よ イエス み手を差しのべたもう いづく?
Nr.65		B	Mache dich, mein Herze, rein	きよめよ わが心

表2 : アリア全 15 曲の声部ごとの分類

声部	曲数	群	群
S	ソプラノ	3 曲	Nr.13 Nr.49 Nr.8
S/A	ソプラノ/アルト	1 曲	Nr.27a(+合唱)
A	アルト	5 曲	Nr.6 Nr.30(+合唱) Nr.39 Nr.60(+合唱) Nr.52
T	テノール	2 曲	Nr.20(+合唱) Nr.35
B	バス	4 曲	Nr.57 Nr.65 Nr.23 Nr.42

## ソプラノ /アルト 二重唱(1 曲)

Nr.27a : So ist mein Jesus nun gefangen <わがイエスは捕らわる>

イエスが捕らわれた悲痛な思いを、2 人の女声が交互に、静かに歌いだし、その間に 3 回、合唱が 待て 主を放せ! と絶叫して、うつろさにさ迷う心を、現実の怒りに引き戻す。

## アルト ・アリア(5 曲)

Nr.6 : Buß und Reu <悔いは罪の心引き裂く>

全 15 曲のなかで最初に歌われるアリアであり、4 声中最多のアルト・アリア(全 5 曲、群の 1 曲を含め)全体の性格を象徴している。ソプラノが純真、従順、乙女のような信仰を表すのに対し、アルトは、マグダラのマリアに代表されるように、イエスに最も近く親しい魂で、人生の曲折を経たのちにイエスに抱き入れられた、おとなの女性の陰影をもっている。

それゆえ、高価な香油をイエスに注ぎかけたマリアの心に共鳴して、イエスを死へと送りこんでしまったことへの深い痛みを歌うのである。

Nr.30 : Ach, nun ist mein Jesus hin <ああ 今や わがイエス去りぬ>

第 2 部の冒頭に、引き立てられていったイエスはいづく、

と深く憂慮し、合唱もそれに和して、ともに尋ね求めよう、といたわる。

Nr.39 : Erbarme dich <憐れみを 主よ>

これこそアルトの真骨頂をなすアリアである。イエスへのおおびと、そんな自分を 憐れみたまえ という懇願であり、ペテロの否認の直後に置かれ、主の十字架架という悲惨な結末の発端の瞬間に歌い出すことで、いっそうの罪の空恐ろしさをえぐり出している。

Nr.60 : Sehet, Jesus hat die Hand <見よ イエス み手を差しのべたもう>

十字架上のイエスに、ひな鳥をその羽の下に抱えこむ親鳥の慈愛を認め、われらも生死をイエスとともに分かとうと呼びかける。死にゆく主の姿を涙で曇らすことなく、そのかいなな飛びこもうとする勇気が与えられている。

## テノール ・アリア(1 曲)

Nr.20 : Ich will bei meinem Jesu wachen <目覚めおらん イエスのもと>

ゲツセマネの園で、血の汗を絞り出して、苦しい祈りを続けるイエスに、不覚にも眠り込んでしまった弟子たちだったが、いまや主の死の意味を自覚して信徒となり、死による主の贖いを信じ、主とともに目覚めていようと、心の姿勢をただし、とり直す。

## バス・アリア(2曲)

バス独唱としては、前2曲(Nr.23,42)で、複雑な群の立場(後述)からの内容を歌ったのに比して、終りに近い後の2曲(Nr.57,65)では、群の立場に立って、すなわち、いったんは主を裏切って、主の赦しに悔い改めたペテロのように、イエスの愛に生かされ、その死後も主の復活を信じて、世に信仰を伝え広めてゆく、力強い真の弟子につくり変えられるのである。

Nr.57 :Komm, süßes Kreuz <来たれ 甘き十字架よ>

イエスの十字架と、わが行くてにかかる苦難とに、深く静かな瞑想を凝らす。ヴィオラ・ダ・ガンバの助奏に支えられて。

Nr.65 :Mache dich, mein Herze, rein <きよめよ わが心>

アルトの、悔いのアリア(Nr.6)に始まり、最終アリアとしては、このバスの爽やかなきよめよ わが心で、すべての独唱曲が締めくくられることになる。これは、イエスの死によって、主の愛に目覚めた弟子が、わが心を主に明け渡して、「わが内には、ただイエス生くるのみ」という晴朗な心境に至りついた表れであり、すなわちバツハ自身のいつわらぬ信仰告白でもあろう。

## 5曲の群アリア

じつは、これこそが、私のもっとも関心を寄せる対象だったのである。これら5曲は、群の10曲と比べて、はるかに屈折した、わかりにくい要素を含んでいる。

Nr.8 S :Blute nur <破れよ 心よ>

Nr.23 B :Gerne will ich mich bequemem <いさみて従いゆかん>

Nr.35 T :Geduld <耐えよ>

Nr.42 B :Gebt mir meinen Jesum wieder <返せ再び わがイエスを>

Nr.52 A :Können Tränen meiner Wangen <わが涙 かいなく 落つとも>

かつて私は、合唱団月報で「《マタイ受難曲》の5つのアリアを追う」と題して、群のアリアの内容の分析を試みたことがある(月報No.400,401号-1995年10,11月。改定版を今号に別冊として添付しました。併せてお読みいただければ幸いです)。今回これをもういちど踏み込んで、精密なものにしたいという考えから、書き始めようとした次第なのだが、月報記事としては、あまりにも長いものになるので、一計を思いつくことになった。

過日、久しぶりに杉山好先生と歓談の機会が与えられ、このことに関する話も出た。少し腰を据えて、ゆっくりお話しし合いたいですね、ということになり、その前提として、先生にあらかじめお目通しいただければ、という気持ちから、この文章が書き起こされたのだった。したがって、1995年のものと今回のものとを併せて、先生のお考えを伺えれば、と期待申しあげるのである。

新年早々にでも、先生をお訪ねして、主として5曲の群アリアを中心に、お話しいただくことを願いつつ、今回はここまでで一応中断させていただくことにしよう。

<了>

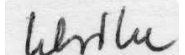
ケルンのウルリーケ・  
ゲープハルト牧師より  
(団友、ケルン・ボンヘ  
ッファー教会牧師)



クリスマス飾りで一杯のケルンから、クリスマスのご挨拶を、心をこめて送ります。

私どもは、礼拝や祝祭の準備で、みな大忙しです。待降節の第3日曜日には、教会の合唱隊がサン=サーンスのクリスマス・オラトリオを演奏しました。これは、これまで私の知らなかった曲です。

もちろん東京では、今年も大きな演奏会を間近にしておられることでしょうか？ それとも、もう終わりましたか？ ご成功を祈ります。ごきげんよう。

  
ウルリーケ

長谷川田鶴子様より(後援会員)

昨年12月に、最も古いイスラムの王国、モロッコに行き、その文化、人、砂漠など垣間見て来ました。モスクの天辺には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のシンボルが飾ってあって、同じ源流を認めていることが、発見でした。御健勝をお祈り申し上げます。

## 月報500号発行に寄せて

1962年7月、合唱団発足とともに発行を始めた月報は、今号で500号を迎えることになりました。

団友・後援会員・団員の皆様の貴重なご寄稿のおかげで、毎号変化のある紙面を構成することができました。

また、しばらくぶりにお会いする時にも、よく合唱団の事情をご存知で、楽しみに月報の届くのを待って読んでいます、とのありがたいお言葉をいただくことも多く、ささやかな小紙が、私共の心を確実に結び合わせてくれていることを、悟らせられ感動いたします。

最近の、次のような一言にも、これからの発行への励ましをいただきました。心より深く御礼申しあげ、さらに501号からどこまで続くかわからない将来へと、いっそうのご理解、ご協力をおねがい申し上げます。

大村恵美子

布施靖子様より(後援会員)

04年1月の月報 有難く昨日拝受致しました。

新年の抱負と、世界とバツハ合唱団への尽きることない熱意と創造の喜びを、はっきり私達に示されて、心から嬉しく、また新しい希望を感じずにはいられません。

# 私はアメリカのイラク侵略に なぜ反対し闘うか

連載 4 (最終回)

森井 眞 (団友)

筆者：歴史家(フランス宗教改革史専攻)、元明治学院大学学長  
報復戦争に反対する会主催第1回ピーストーク(2003年3月13日)に  
ての講演記録を、同会機関紙より転載

- (1) 帝国主義の時代に戻ることは許されない (月報 496 号)
- (2) 100 パーセントの死を覚悟するという事 (月報 497 号)
- (3) 絶対に奪われてはならない人間の尊厳 (月報 498 号)

## (4) 戦争とは、人を殺すということ

(承前)この尊厳という問題に今日はあまり立ち入る余裕はありませんけれども、少し触れたいと思います。

アルベール・シュヴァイツェル。19世紀末から20世紀初めにかけて、バッハのオルガンをあんなにすごく弾いた人はいないと思います。そして哲学者で神学者で、あとから志を立てて医者になってアフリカへ入って行きました。「20世紀の聖人」といわれたあの人が、世界からさまざまなことを学んだ上で「生命の畏敬」を唱えました。生命の畏敬というのは、命を大事にしましょう、などということではないんです。畏敬というのは、Ehrfurcht vor dem Leben、生を前にして畏れかきこむ。生き物が生きていますということ、これはただごとではない、という思いなのです。

人間の尊厳というのは、たとえばその一面を基本的人権、つまり生命・自由・幸福の追求というのがかなり見事に表していると思いますので、それを手掛かりに「尊厳」について少し述べてみます。でも考えてみれば、生命・自由・幸福の追求というのは、これは人間に限ったことではないので、他の動物もすべて一番大事なことですよね。

人間が他の動物と多少違うと思うのは2番目の自由です。自由といえば物理的・肉体的な自由と精神的・内的な自由というのがあります。もっとも、その内的自由ですが、たとえば犬なんかでもブッシュよりずっと思慮深そうな顔しているのがいますでしょう。まるで内なる世界があるような。しかし私は犬の言葉がわかりませんので、話は人間にかぎることにします。

まず「生命」。生命が奪われればすべて終わりです。生命ははかないものです。それだけに絶対に不条理に奪ったり奪われたりしてはならないのです。

第2に「自由」。肉体的自由も大事ですが、それが奪われればこれは誰にでもわかる。けれども精神的自由ということには、とくに私たち日本人は鈍感かもしれないと思うんです。命を奪われれば終わりです。その命とは肉体の命です。ところでその肉体は内なる世界を宿しています。この内なる世界というのは自由の王国なのです。何人も踏み込むことを許さない。われわれ一人ひとり自由の国の王様なのです。その自由の尊さに気付いているかどうかが問われます。

いま私たちの内なる世界は権力にさんざん踏み込まれて

います。それを許しています。たとえば日の丸・君が代は、100パーセントか90何パーセントかの公立学校でやられてますでしょう。それから今の有事立法その他。この内なる世界についてちょっと考えてみようと思います。

われわれは内なる世界でものを考え、疑い、信じ、あるいは愛し、他者の痛みを痛み、無限の宇宙とか超越的なものへの畏怖の想いをもち、ただ沈黙せざるをえないような圧倒的な自然の美あるいは芸術の美、人間の無償の愛の行為、そういうものへの感動・感激というものに魂を揺さぶられます。私はこれは大変貴いことだと思います。本当に尊厳、そういう内なる心というものを人間はもっています。

第3に「幸福の追求」。人は「私の幸福とは何か」と問いながら、人それぞれに自分の幸福を求めてけなげに生きている。その歩みを誰も妨げたり奪ったりしてはいけないと思うんです。人間が他の誰とも代えられないような一度かぎりの人生を生きていること、その尊さ、何ものにも侵されてはならない、奪われてはならない、その生を生きているということの尊さ。それを認めるということがわれわれにとって本当に大事なことだと私は思います。

戦争は戦死者から尊厳を奪いましたけれど、戦死者だけでなく国民すべてから、国家は人間の尊厳を奪いました。たとえば生命について、われわれは「天皇のためにお前の命を喜んで捧げろ」と強いられました。自分の命を大事にしようという者は「弱虫、卑怯者」と罵られました。

自由というのは一番恐れられ危険なこととして嫌われ、1925年の治安維持法で、私たちは思想の自由を奪われました。国民はお上の言うままに生きていけばいいんで、自由にものを考えるなんてもってのほかだということ。われわれは、いまだにお上によって監視され管理されようとしているわけです。

それから、幸福の追求。「自分の幸福を追求して生きようなんて奴は卑しい奴だ、利己主義者だ」と言われました。「国民は自分の幸福のためじゃなくお国のために生きるべきだ」と言われました。人間はお国に役立つが役立たないかによって評価されました。

したがってとくに戦争になれば、戦争に役立つが役立たないかによってその人の価値が決まる。ですから、人種の差別、部落の差別、性の差別、障害者の差別、人間が差別されるのは当然のこととして肯定されたのです。人間の尊厳というのはどんな障害があろうがなかろうが同じなのです。ところがあの時代には尊厳がさまざまな形で認められなかった。それがあの戦争の時代です。

以上、まず戦争で殺された者を中心としての人間の尊厳を奪う戦争の意味です。

その次に、殺すことについて。

中国に一兵士として連れて行かれたある人が、中国での戦争の最中にひとりの中国の捕虜、縛り上げられている捕虜を上官から「銃剣で突き殺せ」と命令を受けました。その捕虜は必死で、すごい形相で「助けてくれ、命だけは助けてくれ」と叫んでいるんですけども、「殺せ！」と命令する上官が刀を抜いて脅かしているんです。どんなに辛くても突き殺さざるをえなくてこの兵士はついに目をつぶって、「助けてくれ」と命乞いしている中国人の捕虜を突き刺

した。突き殺したんだそうです。

戦争が終わって、この人は無事日本に帰って来るのです。しかし何年たってもあの「助けてくれ」と叫んでいた中国人の捕虜のあの顔が忘れられない。起きても寝てもあの中国の捕虜のすさまじい顔が忘れられないと言うんです。それで、せめてもの罪の償いのつもりで彼は語り部になりました。「戦争っていうものはこういうことを強いるものだ。俺は辛かったけれどもどうしても逃げられなかつた。そしてついに殺してはならない人を殺した。殺してはならない人を殺すということがどれほど恐ろしいことか。それを強いるのが戦争だ」ということを、彼は1800回語りつづけているんだそうです。

これを強いるのが戦争なのですね。しかしこの語り部よりもっと深い傷を心に受けた人もいます。その人たちは語れないんです。触れられないんです、傷に。いっさい触れられない。思い出したくない。ただ自分の中に閉じこもって何にも語れない。語り部になれる人はまだいい。語り部になれないほどの傷があるのです。

野田正彰という精神科の医者がいます。この人は実にまめに日本中歩き回って、戦争から帰ってきた人の戦争体験を聞いています。ところで、戦争で心に傷ついた病気のことを「戦争神経症」というのだそうですが、日本では戦争神経症にかかっている人は意外と少ないんだそうです。

アメリカでは、ベトナム戦争の後で戦争神経症にかかって自殺した人や、精神に異常をきたした人は、多いそうです。ところが日本では、2000万というアジアの人たちを殺しておきながら、生きて帰ってきている人もたくさんいるけれども、戦争神経症で悩んでいる人は意外と少ない。平気で戦友会かなんかに行行って、「戦争中おれは何人殺した」なんていう話ができる人がたくさんいるのです。あるいは何も言わないで黙ってふつうに生活している人がたくさんいる。

野田正彰さんは、このことについてこういうふうに言っています。「あの戦争中の日本は、人間が傷つくことを許さない文化の国だったからだ。他者を傷つけてもそれで自分が傷つくことはない。他者の痛みが自分の痛みにならない人間、感情鈍磨の人間を戦争中の日本はつくっていたのだ」と。そして「それは今もなお尾を引いている、引きつづけている」と野田正彰さんは言いました。

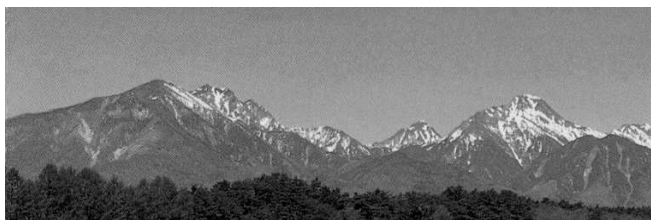
他者の痛みに対して鈍感な人間。戦争をするためには人間の尊厳に敏感な人間では困るんですね。戦争をやるためには、国家は人間の尊厳に鈍感な人間をつくらなければならない。それを日本はやっていた。そして未だに、その日本が、その文化がまだ尾を引いていると言う。われわれが今もそこに生きているということを、本当に自分自身の問題として真剣に考えなければいけないと私は思います。

今たとえば、自民党の政治家たちはこんな風に言います。「北朝鮮の脅威がある、いつ北朝鮮と日本が戦争になるかもしれない、もしそうなったらアメリカに北朝鮮に核爆弾を落としてもらおう、そのためにはアメリカの言うことを聞いておかななくてはならない」と。心の中で思っている人、あるいは口に出す人さえいます。もしそうなったら北朝鮮の人が死ぬ。北朝鮮の人もわれわれと同じように奪われてはならない尊厳を生きているのです。イラクの一人ひとりの

人間も奪われてはならない尊厳を生きているのですね。あの政治家たちは、自分さえ無事なら、人が死ぬことを、日本人以外の人々が死ぬことを何とも思っていない。いや、日本人でも民衆が死ぬことは何とも思っていない。この鈍感さを、どうお思いになりますか。私は、これは恐るべき人間性の墮落、許し難い人間性の喪失だと思います。

私は、戦争とは人間の尊厳の抹殺だと言いました。これが今始まろうとしている。イラクという国は遠いです。想像力を働かさなければ、われわれはイラクの人たちのことを考えられない。でも、一人のイラクの人であっても、同じ人間の尊厳を生きているのであって非道に殺されてはならない。この戦争を絶対に許してはならないという叫びを、われわれは最後まで、形勢が逆転するまで叫びつづければならないと思います。

(完)



## 寒風の2003年末に 喜びと希望の一日

澤 和樹 門下生によるフレッシュ・コンサート

大村 恵美子

2003年12月27日、世の大反対を押し切って、航空自衛隊先遣隊が、クウェートに放たれてゆきました。その日の16時から19時40分にわたって、澤氏門下生によるヴァイオリンのジョイントコンサートが、府中の森ウィーンホールで行なわれました。

1996年来つづいている年1回の恒例の発表会だそうで、今年が8回目。東京芸術大学および付属高校在学の、高1から大学院1年までの15人による、J.S.バッハ4曲、ヴィヴァルディ、タルティーニ各1曲のヴァイオリン・コンチェルト、ヴィターリ「シャコンヌ」、タルティーニ「悪魔のトリル」、ヴィヴァルディのコンチェルト「四季」と、豪華なプログラムが、師の澤和樹氏の指揮によって繰り広げられました。ヴィオラ、チェロ、コントラバスは上級生たちの賛助出演、鈴木優人氏のチェンバロという、質の高いオーケストラ。

私たちの友人、西川秀人・裕子ご夫妻の一人息子の豪君（大学1年）が、タルティーニのコンチェルトに出演ということで、お知らせいただいたのです。バッハ合唱団では、豪君のご両親が大学生の頃から（私自身は秀人さんが芸大入試の高校生の頃から）のお付き合いで、その豪君がオーケストラ伴奏の初舞台ということは、感無量です。また今日の中心人物、澤和樹氏も、1976年から1978年の間、東京シティフィルに私たちの定期演奏会をお願いしていた頃の、コンサートマスターとして活躍なさいましたが、今はこのように立派な門下生を育てられ、ご自身の愛嬢、亜樹

さん（高校1年）も出演されるという日なのです。

プログラムとしても、こんなにバロックの弦楽コンチェルトをまとめて聴く機会はなかったし、それも粒選りの、輝くような少年少女が、師の指揮のもと、真剣に全力を競い合うのですから、こんなに感激のシーンは、そうあるものではありません。コンクールとは全くちがう、喜びと希望のみをひたひたと感じる、夢の一日でした。

2003年は、一方で険悪な暴力を世界中に向かって全開するような、すさまじい年でしたが、私個人としては、仕事の上で思いがけない大きな収穫が続いたし、また知人のひとり（と呼ばせていただく）野村萬斎氏が、父上万作氏と一緒に、ご長男祐基君（4歳）の初舞台「靱猿」を披露さ

れたのに立ち会え、私自身の姪と甥に赤ちゃんが誕生、合唱団の中でも、お孫さんの誕生が相い次ぎました。

育つ力が後に続くのは、人類にとって、なんという希望でしょうか。経済不況、戦争などから、ニヒルに呑みこまれて、その日その日を無為に送る子どもを抱えるのは、おとな世代の怠慢・無気力によるものに他なりません。そうしているうちにも、あちらこちらで、大切な芽をいたわり、はげまし、育ててゆく人があり、そのような継続の現場に招かれるのは、私たちの生きる希望そのものです。

今日のコンサートを担われた一人一人の方々に、心からの感謝をし、明るい気持ちで困難な年越しに立ち向かえることの御礼を申しのべます。前途の幸運を！